

「立ち上がる農山漁村」選定事例概要

取組分野：【交流】

1. 都道府県、市町村 埼玉県宮代町^{みやしろまち}

2. 事業者名 埼玉県宮代町

3. 取組みの名称 「農」のあるまちづくり～「新しい村」の取組～

4. 取組概要等

概要

平成9年、「農」あるまちづくり基本計画を策定。平成10年より拠点施設として「新しい村」として、農産物直売所・市民農園・育苗施設・加工施設等を整備した。「新しい村」は東武伊勢崎線東武動物公園駅から1kmと中心市街地から近い場所にも関わらず、町の原風景である水と土と緑の宝庫である。13haのエリア内には、さいたま緑のトラスト第5号保全地に指定された山崎山の雑木林や、開墾当時の堀上げ田（ほっつけ）が残り、カワセミが飛来する貴重な自然環境が残っている。

これらの昔からある自然豊かな里山の農村風景を町の財産として維持していこうという「農」のあるまちづくりの理念のもと、農村景観や水辺等に配慮し、「農」の息づく快適で自然豊かな空間が整備されている。農産物直売所や農産物加工施設、市民農園等の運営管理は、町・町民が出資して設立した「(有)新しい村」が請負い、農産物直売所の管理、体験学習事業の企画、農作業受託等の農業支援など幅広く実施している。職員の多くは町内在住者が従事し、町民主体による運営が行われている。

また、13haに及ぶ農村景観の管理には多くの町民ボランティアが参画し、ハーブガーデンズクラブ、結(ゆい)の里いきいき塾、市民農業大学OB会、NPO法人水と緑のネットワーク、竹のアート実行委員会等が「新しい村」を拠点に活動を展開している。こうした町民ボランティアの参画を得て、「農」の息づく風景を保全し、心の潤いのある環境と共生するライフスタイルを宮代らしさとして創造する「農」のあるまちづくりが進められている。

活動の規模

項目	H13	H14	H15	H16	H17
来客数	288,000	460,000	513,000	499,000	545,000
解説	単位：人				
雇用者数	85	98	115	120	130
解説	単位：人 生産者組合員数				
イベント回数				9	19
解説	単位：回 H15まで統計がないため、記載無し				
イベント参加者				42,000	64,000
解説	単位：人 H15まで統計がないため、記載無し				

活用している地域資源

宮代町のまちづくりの理念である「農」のあるまちづくりとは、先人から継承されてきた田畑や屋敷林、雑木林等の「農」の風景やそれに関わる知恵や営みを、宮代町の個性、資源として捉え、これを維持修復するとともに、環境、福祉、教育、産業などあらゆるまちづくりに生かしていこうとする考え方である。

宮代町特産物の巨峰の時期には「巨峰市」を開催していき、農村文化を代々に「さなぶり市」、「宮代かかしまつり」、「そば打ち教室」等や、農村景観を活用して竹のオブジェを制作・展示する「竹アート」を行っている。その他、開墾当時の堀上げ田が残る「新しい村」の「ほっつけ」では、田んぼの学校を開催し、町内小学生や近隣非農家の体験学習の場として活用されている。

また、「新しい村」内にある里山で、さいたま緑のトラスト保全地に指定された山崎山周辺では、自然や環境を学習する場となっている。これらの事業については、(有)新しい村のほか、多くの町民団体、町民の参加により運営されている。

地域活性化のポイント

「新しい村」を拠点として、「農」のあるまちづくりを町民相互理解、町民参画のもとに推進していくため、地域内自給を目指し農業サービス施設や機械化施設を充実させて生産活動を応援することで農地の保全を図る、特産品開発等の創造、加工体験等の食育のふれあい、土に親しみながら農作物を育て、農業をより身近なものとして理解するため、都市と農村の交流について「(有)新しい村」を中心として事業の充実、ほっつけ水田や雑木林等の資源を活用した町民活動、と(有)新しい村の事業を有機的に結びつけている。そして、より多くの町民に「新しい村」に残された自然豊かな景観に親んでもらい、町民みんなで宮代の「農」の息づく景観を守っている。

事業の今後の展開方向

町内に「新しい村」という種がまかれ、農地や人に発芽し、育み、実らせてきた。そして、豊かな大地を目指して、次のような種を育てていく。

まず、「新しい村」の農業サービス事業として、現在、遊休農地を活用した農産物の栽培を行い、「村育ち」とネーミングして販売を行っている。今後は、この「村育ち」の生産販売の拡充を行うとともに、農地の保全を図る。

次に、学校給食の地域内農産物の供給について、「新しい村」オープン前は、町特産物の巨峰の提供だけにとどまっていたが、現在は農産物全体の3割弱までになっている。町の子供の体は町の田畑で作ろうと、今後も「新しい村」を核として、顔の見える安心な農産物の提供と、より一層の供給率の拡大を図る。また、生産者組合員数は、年々増加しているが、高齢化しているのも現状である。現在活躍している新規就農者（ルーキー農業塾）やNPO法人等、農業への新規参入者への支援を図っていく。

